

## DOCOMOMO2007 東海大学湘南校舎見学会について

(2007年4月14日(土) 10:30~12:30)

東京家政学院大学住居学科 大宮司勝弘

天気恵まれた4月14日の午前、今年度総会の行われる東海大学湘南校舎において山田守により設計されたキャンパスの見学会が行なわれた。

湘南校舎は神奈川県平塚市と秦野市にまたがる397,803㎡もの広大なキャンパスである。建設は昭和37(1962)年に開始され、同大学の理事でもあった山田は校舎設計だけでなく、敷地の選定、資金の調達にまで関与している。当初は設計料を受け取らず、自身の夢の実現としてその建設に尽力したそうである。しかし山田はその完成を見る事はなく、建設途中の昭和41(1966)年に没している。

着工から44年経た現在では校舎数が54棟にも増加したが、その内16棟が山田自身の設計である。山田は同大学で銅像も建てられているほど重要な功労者として扱われ、それらで解体されたものは無い。しかし最近では手狭で老朽化が問題となっている校舎もあり、その保存は予断を許さない状況にある。

1号館(1963)から見学を始める。これは東京厚生年金病院(1953)以来、山田の得意とするY字平面の建築である。ここでは通常閉鎖されている空間が特別公開されたが、そこには若き日の山田が昭和3(1928)年の第7回分離派建築展で発表したものと酷似した照明器具が眠っており、驚かされた。

次に訪れた伸びやかな反り屋根の武道館(1966)は、代表作である日本武道館(1964)同様、山田のこだわった富士山を思わせる稜線を持つ古典的モチーフの建築である。残念ながらこの日は大会直前の柔道の練習があり、内部の見学は出来なかった。

それから8棟の同型校舎の並ぶ実験実習棟群に向かい、中でも同大建築学科の入るH棟(1966)を見学する。ここでは東京通信病院(1937)にも見られた折り返しスロープがあり、その端部でのスラブ厚の薄さや折り返し部平面のバラバラ曲線など山田のこだわりを確認した。

H棟を後にしばらくキャンパス内を散策しながら移動。着工当時は原野だったキャンパスも現在では多くの緑に覆われ、風光を重視した山田の意図が伝わる。途中で前述の山田銅像に直面、その奥には松前会館が建てられている。松前会館(1966)は教職員用の厚生施設でありキャンパス内にあっては小振りだが、コーナーに曲面ガラスを使用したカーテンウォールや長沢浄水場(1957)を思わせるマッシュルームコラムのある浴室など、山田テイストにあふれた建築である。

次に3号館(1966)に向かう。これは10階建ての高層建築で、垂直動線を集約した円筒部が特長的である。その外周の螺旋スロープは自動車が上がり各階に寄せられるようになっており、建築と交通インフラを融合したような意欲的な設計といえよう。

3号館最上階まで登り、キャンパス全体や遠く江ノ島までの眺望を楽しんだ後、最後に2号館(1964)を見学した。これは3032人収容の扇型大教室と1000人収容の扇型教室を対峙させたキャンパス内最大の大空間建築であり、多人数教育に対する建築的提案を行なったもので、大きな屋根のオレンジ色がひと際目立つ存在である。

皆さん熱心に見学していたが、総会の時間も迫り、最後は急ぎ足で終了した。今回はおよそ60名の方が参加して下さい、にぎやかな見学会となった。少しでも山田の想いが伝わっていれば幸いである。そして最後に遠方から訪れてくださった参加者の皆様やお手伝い下さったスタッフの方たちに感謝を述べたい。